

令和4年度 江戸川区立小松川小学校 学校関係者評価 最終評価用報告書

学校教育目標	○心豊かな 思いやりのある子 ○よく考え 進んでやりとらず ○健康な 明るい子	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	○確かな学力を付けられる学校。情熱をもって教育活動を実践する学校。家庭・地域と協力し、心豊かな児童が育つ学校。故郷として誇りがもてる学校。 ○他とともに大切に知る知・徳・体のバランスのとれた児童。 ○児童を深く理解し、わかる喜び、できる喜びを味わえる授業の創造ができ、安心して過ごせる空間を創造できる教師。					
前年度までの学校経営上の成果と課題		<成果> 「教科担任制」による取り組みが定着し、質の高い授業の提供や教員間での協働が円滑に行われるようになってきている。 <課題> 自己肯定感や自己有用感についてはもっと高められる。「できた」「わかった」「たのしい」と感じられる経験などの成功体験を積み重ねられるようにしていく必要がある。						
教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価		学校関係者評価	来年度に向けた改善策
いいきと学ぶ学校づくり	確かな学力の向上	・7つの主な事業（取組）に対しての学校の組織的な対応による取組の実施・充実	※学方向上推進プランの見直しと改訂を行う。 ※国語科の説明の領域についての授業研究を進める。 ※授業内での言語活動を重視していく。 ※事業委託業者と協力して、放課後補習教室を運営し、算数科における基礎基本の確実な習得を図っていく。 ※タブレットを活用して学習を促す。 ※家庭学習の習慣化を図る。	※国の学力調査の結果分析をもとに10月中旬までに各4年度版学力向上推進プランを作成する。 ※各学年1回ずつ授業発表を行い、わかる授業づくりをめざしていく。 ※計算能力の確実な習得を図り、東京ベージングリルの「数と計算」領域での得点率について90点以上の児童が83%だった。1学年ほど取りこぼしやすくなる傾向にあるので引き続き努力していく。 ※eライブラリーを活用し個別最適化された学習に結びつけており、習慣化しつつあるといえる。	A	A	※領域を決めて授業案を各学年で実施していることに感じました。 ※eライブラリーが習慣化しているのは先生方の努力の成果であると思います。 ※引き続きよろしくお願いいたします。	※来年度は「誰一人取り残さない」学力向上に向けたアクションプランを作成することになり、今年度作成した学力向上プランを参考に、教員の授業力向上・基礎学力の保証・学習習慣の確立に向けての取り組み内容や支援が必要なる児童への手立ての充実を図っていく。その中で、本年度成果を上げるようになった校内研究、放課後補習教室を行外部団体との連携の強化、iPadを活用した家庭学習についてもさらに充実させていく。
	体力の向上	・「運動意欲の向上」に向けた取組の実施・充実	※学ぶ意欲を高める体育授業をめし、授業の質の向上を図っていく。 ※週1回設定された運動遊びの時間を有効に活用して、運動の楽しさを味わえるようにする。 ※専門家をゲストティーチャーとして招き、運動の基本など走上についての力向上を図る。 ※体力状況調査の結果を分析することとさらなる体力の向上を図っていく。	※東京都小学校体育研究部会の実践例を参考にしながら、児童が楽しく取り組む授業を実施する。 ※アスリートに学ぶ点に即する実技指導を全学年で1回ずつ合計12回行い、運動の基本となる力の向上を図る。 ※昨年度課題であった持久力についての向上を意図的に取り組み、Tスコアでポイント程度高まっている。 ※各学年年間35回以上、学校図書館を利用する。 ※年に1回読書イベントを実施したり、地域図書館の団体貸し出しを年間を通じて利用したりして、読書への興味関心を高め、また読書の幅が広がるようにしていく。 ※SSSや図書館支援員を活用し、季節にあった飾りや掲示物の交換を月1回行う。また、学期に1回以上おすめ本コーナーの入れ替えを行う。	A	A	※学習カードの活用など学習のめあてを明確にしてから、児童が楽しく自主的に運動に取り組んでいる様子が見られるようになってきている。 ※全学年でアスリートによる体験授業ができた。 ※体力テストを経年比較した結果、8項目中6項目以上でスコアを伸ばした学年が3つあった。持久力については依然として傾向にあるが、昨年度と比較では2.1Pでスコアを伸ばすことができた。 ※年間35時間以上の図書館利用をすべての学級で実現できた。また全学年で月1回入れ替える団体図書館の団体貸し出しを利用し、読書などでも活用した。 ※学校図書館をすべて教科横断的な学習を行うこととして好評だった。 ※おすめ本の紹介や掲示物の交換についてはSSSや図書館支援員の協力を得て、月1回の入れ替えを実現でき、子どもたちも季節を感じることもできるようになった。	※体力テストの結果の上昇に驚いています。テスト前の先生方による指導や明確なめあての設定ができるように授業力が高めていく努力を怠りません。 ※先生方の頑張りがよく見えました。 ※引き続き子どもたちへの指導をよろしくお願いいたします。
	読書科の更なる充実	・読書を通じた探究的な学習の実施・充実	※読書科年間計画や学校図書館全体計画に基づいて他教科との横断的な学習を展開を行うなど読書活動を推進していく。 ※昼読書の時間や読みふける時間を活用して読書活動の充実を図っていく。 ※SSSや図書館支援員の協力を得ながら、おすめ本のコーナーの充実化を図り、読書への興味関心を広げられるようにする。	※各学年年間35回以上、学校図書館を利用する。 ※年に1回読書イベントを実施したり、地域図書館の団体貸し出しを年間を通じて利用したりして、読書への興味関心を高め、また読書の幅が広がるようにしていく。 ※SSSや図書館支援員を活用し、季節にあった飾りや掲示物の交換を月1回行う。また、学期に1回以上おすめ本コーナーの入れ替えを行う。	A	A	※計画的に図書館を利用してることが増えました。 ※全学年が35時間以上利用したということで、担当の先生方による読書習慣の順や調整など大変な努力があったことと思います。 ※年間貸し出し数や1日の平均貸出数なども紹介していただけたらよい。	※読書科年間計画に沿って指導を行い、また、他教科との横断的な学習を意図して来年度も図書館を活用していく。 ※団体図書館の貸し出しを来年度も行おう。読書の時間の確保や学級図書館の充実など読書環境の充実を図っていく。
	共生社会の実現に向けた教育の推進	・ユニバーサルデザイン視点の取組の充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副障交流、交流及び共同学習の充実	※校内委員会での活性化を図ることによる指導・支援の充実を図る。 ※巡回指導教員と学級担任の連携共有の推進する。 ※インクルーシブ教育に関する研修を年間1回以上設ける。 ※ユニバーサルデザイン視点を取り入れ、どの子にもわかりやすい配慮を施した授業づくりを進める。 ※エンカレッジルームを個に応じた学習の場として活用する。 ※副障交流を一つの機会として、交流及び共同学習をすすめていく。	※学級担任と巡回指導教員の情報共有の場を指導課に設け、おすめ本について、在籍学級で生じている。 ※巡回心理士にインクルーシブ教育の基礎的なことについて研修を行い、各学級で活かした。 ※意欲がなくても、視覚的に指示がわかるようにすることについては、全ての教員が実現している。 ※エンカレッジルームは教室環境に馴染みあわない児童の受け皿としての役割を担っており、完全な不登校児童を支援する場として活用している。 ※副障交流については毎月1回程度の頻度で実施でき、共生社会の実現に向けた取り組みが児童が増えている。	A	A	※巡回指導記録を共有して、担任と巡回指導教員間で巡回指導の内容や成果について在籍学級で生じている。 ※巡回心理士にインクルーシブ教育の基礎的なことについて研修を行い、各学級で活かした。 ※意欲がなくても、視覚的に指示がわかるようにすることについては、全ての教員が実現している。 ※エンカレッジルームは教室環境に馴染みあわない児童の受け皿としての役割を担っており、完全な不登校児童を支援する場として活用している。 ※副障交流については毎月1回程度の頻度で実施でき、共生社会の実現に向けた取り組みが児童が増えている。	※巡回指導教員やカウンセラーなどの情報共有を密に行い、在籍学級での指導に生かせるようにしていく。 ※来年度も指示の可視化をはじめ、授業や教育活動のユニバーサルデザイン化を図っていく。支援が必要な児童への配慮やわかりやすい授業づくりを推進していく。 ※エンカレッジルームを個を抱えている児童の支援の場として今後も活用していく。 ※副障交流を今後も定期的に継続して、共生社会の実現に向けて子どもたちが前向きな思考をもてるようにしていく。
特別支援教育の推進	子供たちの健全育成	・子供たちの健全育成に向けた取組	※いじめ・不登校の未然防止に向けた魅力ある学校づくりの取組を実施する。 ※生活指導連絡協議会を活用し、積極的な情報収集を行う。 ※ふれあい月間での取り組みやいじめアンケートを実施する。 ※週1回の職員打ち合わせを行い、情報共有することによって同一方向での対応が図られるようにする。	※児童の意識アンケートで学校が楽しいと答える児童が90%以上であった。 ※朝と夕方に必ず児童一人一人を縦断に観察し、普段と違う変化も見逃さない観察態を全ての教員が身に付けた。 ※毎学期ごといじめ調査アンケートを実施することを通じて、深刻な事態になることを防ぐことができた。 ※いじめ・不登校対策委員会を定期的に開催し、年度末までは特に不登校傾向にある児童についての対応を考え、職員間で共有することができた。	A	A	※「見過しゼロ」の合言葉が明確でよいと思います。 ※学校が楽しいと答える児童の割合が高く、安心できます。 ※いじめに対して早期に対応していることがよくわかりました。 ※いじめの年間10回来実施を確実に行う。また、聞き取りを行う時間も十分に取って、トラブルの解消の手立を考えた、好ましい人間関係が築けているように支援していく。	※来年度はいじめ見逃しゼロ」を合言葉に子どもたちの様子を見ていくことと、いじめが起きたときに適切な対応がとれるようにする。
学校関係者評価の充実	教育活動の改善・充実に向けた学校関係者評価の実施・改善	※学力調査の結果や体力状況調査の結果や、分析結果を共有し、学校経営の方向性を協議する。 ※学校の様子を直に参観していただく機会や行事の様子についての情報を評議員会で積極的に発信する。 ※ホームページや学校だよりを通して、学校の様子を積極的に知らせしていく。	※中間評価や最終評価を確実に行う。 ※学力調査結果、体力調査結果、児童・保護者アンケートの結果など、学校経営についての評価に必要な資料を確実に提示する。 ※学校での児童の様子を見る機会をふとこと知ってもらうために、評議員会では授業参観を必ず取り入れるようにする。	B	B	※外部への結果公表は遅れていまい、内部で共有して改善につなげていくことが重要である。 ※今後も評価を充実させていっていただきたいと思う。 ※学校での様子を一生懸命公開している様子が伝わってきた。継続していくことを期待している。	※来年度も学校での様子について、発信を充実させていく。 ※学力調査結果や体力調査結果から本校の学力や体力の特徴や傾向、それに対する対応策などを考えていって示せるようにしていく。	
学校と家庭、地域、関係機関との連携強化	各関係機関との連携の強化と充実	・専門チームやSSWの活用による家庭への支援の実施	※専門チームの派遣要請を行い、専門的な見地からの助言を教育活動に生かしていく。 ※支援が必要な児童をもつ保護者に対して、就学相談を含め、相談機関への連携を行っている。	※児童の困り感を明確にするために専門家の力に期待したく職員1人以上以上、教育活動に生かす。生活面での支援が必要な家庭について、SSWを効果的に活用し、2件以上の成果を出すように模索する。	A	A	※学校内部だけでなく、関係機関と連携できているのは、子ども一人一人をていねいに見取っているからだと思います。 ※警察などとも連携を取り、SNSの安全利用やネットモラルなどについて、親も巻き込んでも再確認していく。	※来年度もSSWや専門チーム派遣をはじめとした関係機関と連携をしっかりと、子どもたち一人一人をていねいに見取り、支援していく。 ※警察などとも連携を取り、SNSの安全利用やネットモラルなどについて、親も巻き込んで再確認していく。
SSや介助員などの人的配置と活用の充実	・不登校傾向にある児童の支援や特別なニーズを必要としている児童への支援者としての活用	※エンカレッジルームが個に応じた学習の場や教室にない児童の居場所となるように運営するなどの人材として活用していく。	※介助員を付けた方が望ましい児童について、介助員が配置されるように人員の手配を行う。 ※学校行事ごとに関心のある児童について保護者との連携をとり、1日でも多く参加できるようにしていく。	A	A	※教育実習生を介助員として任用するなど、人材確保に努めた。スタッフサポートの役割合いの力にも活用され、児童の生活、教育で必要となる児童やエンカレッジルームの児童への支援を厚くできた。	※任用手続きは大変かと思いますが、これからも多くの人材を活用していただきたい。 ※人探しなどで協力できることがありましたらお知らせください。	
「学校における働き方改革プラン」に基づく取組の実施	・「学校における働き方改革プラン」に基づく取組の実施	※時間外勤務時間が増えるように各職員が努力する。 ※職員定時一時一斉退勤を設定し、ゆとりあるワーク・ライフバランスの一助となる。 ※見直しを立てた業務遂行により、効率化を図る。	※時間外勤務時間増減を45時間以内に抑えるように各職員が努力を付け、適量労働が見られた場合は面談を行い解消を図っていく。 ※教職員一斉退勤退勤日を毎月1回設定する。	A	B	※見直しをもった業務遂行ができており、数を除いて時間外勤務45時間以内を達成できている。 ※仕事以外のライフプランの創生が必要と思われる教職員の働き方について検討していった。	※タイムマネジメント能力の向上は今後も必要かと思ひます。 ※遅い時間まで職員室の電気がついてることが多いので、業務の一層の効率化に期待しています。	
異学年交流の充実	・なかよし班活動による縦断活動の充実 ・異学年の児童への、上級生としての自覚の醸成	※なかよし班による年7回の異学年交流を実施する。 ※兄弟学年による学年遊びを実施する。 ※クラブ活動、委員会活動の運営に取り組む。また、委員会活動で児童が運営している形にしている。	※縦断活動の児童の満足度は85%以上にする。 ※クラブ・委員会活動の運営について、3学期間全てのクラブ・委員会活動で児童が運営している形にしている。	A	A	※兄弟学年遊びでは上級生が下級生のために一生懸命企画立案している姿が見られた。成功体験も得ることができた。児童の満足度は90%に達した。 ※クラブ・委員会活動の運営が児童自身でできようと思ひます。	※リーダーとフォロワーの役割を体験を通して学び、そしてその楽しさを味わわせる取り組みは素晴らしい。児童の自主性・主体性を育てる場になっている。 ※クラブ・委員会活動の運営が児童自身でできようと思ひます。	
特色ある教育の展開	体験学習の充実	・学校の外に出て地域の学習科による学習や専門家から学べる機会の充実	※生活科見学、社会科見学、地域探検、日光移動教室などの校外学習を実施する。 ※お掃除教室やシェパードアカデミーの招致、カヌー教室などの専門家から直接学ぶ機会を設定する。	※各行事のプログラムを考え、児童の満足度が90%以上になるようにする。 ※各学年1回以上専門家から学ぶ機会を作る。 ※下学年では地域学習を積極的に進行。	A	A	※校外学習の感想では、児童の満足度は95%だった。 ※実際に外部講師を招いた出前授業の他、オンラインを活用した専門家との交流などの機会を積極的に設けることコロナ前以上に学習の機会が設定できた。	※オンラインを活用した専門家との交流という手は有効活用し、子どもたちに本物になる機会をこれからも充実させていく。 ※地域学習を通して、「ふるさと小松川」を意識させ、地域の未来の担い手であるという自覚を今後も育てていく。